

## 三つの使命

2009.5.26(火)  
ベック兄メッセージ(メモ)

### 引用聖句

コリント人への手紙・第二 5章14節から6章2節

というのは、キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです。私たちはこう考えました。ひとりの方がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのです。また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。これらのことはすべて、神から出ているのです。神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。すなわち、神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせないで、和解のことばを私たちにゆだねられたのです。こういうわけで、私たちはキリストの使節なのです。ちょうど神が私たちを通して懇願しておられるようです。私たちは、キリストに代わって、あなたがたに願います。神の和解を受け入れなさい。神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方において、神の義となるためです。私たちは神とともに働く者として、あなたがたに懇願します。神の恵みをむだに受けられないようにしてください。神は言われます。「わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。」確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。

「私のすべてを主にささげよう」と今一緒に歌いましたが、この歌詞は兄弟姉妹の告白だと思います。このような心構えがあるなら、主は間違いなく豊かに祝福して下さいます。

今日は、新約聖書の中で主が人間に与えられた三つの使命について、ともに考えてみたいと思います。

聖書を読むと、主から特別のメッセージを託された人々のいることが分かります。この人々は、主のご計画の特にある面を知らされ、それを中心に人々に告げ知らせるように、主に立てられた使者です。悩みや苦しみを通して、このような特別のご奉仕ができる人々が生まれてきました。全能なる主は、ある何人かの人々に、当たり前でないメッセージを

与えられました。このメッセージは普通のメッセージと少し違います。特別なメッセージを人々に告げ示しています。なぜなら、告げ示された人々自身そのことを身をもって体験しているからです。

新約聖書をみると、三つの違った種類のご奉仕のあることがはっきり分かります。この三つの種類のご奉仕は、互いに共通したところがありますが、また違った面もあります。そうだとすると、互いに違った面が矛盾し合っていません。

このご奉仕の違いはどこから生まれてくるかと言いますと、主がそれぞれ異なった賜物を奉仕者に与えておられるからです。そこで、新約聖書の中から、三つの違ったご奉仕をなした三人の代表的な人物、即ち、ペテロ、パウロ、ヨハネの例を挙げて、この三人についてともに学んでみたいと思います。

主はこの三人に、それぞれ異なったメッセージを与えておいでになります。この三人を学ぶとき、私たちが「主のみこころがどこにあるか」を知るようになれば幸いです。言えることは、ペテロもパウロもヨハネも、キリスト教という「宗教」のために宣伝したのではなく、イエス様だけを紹介したことです。

#### \* 第一番目。 ペテロのご奉仕

まず、新約聖書を読むと、「ペテロのご奉仕」というものがあつたことに気づきます。マルコ伝の著者マルコは、直接イエス様とともに過ごした時間は短かつたでしょう。しかし、ペテロと一緒に長い間過ごしました。マルコ伝を読むと、「イエス様についての知識」は大部分がペテロから学んだものであることが分かります。ですから、マルコ伝を読むなら、ペテロの「イエス様に対する知識」がどのようなものであつたのか分かります。また、ペテロについては、ペテロの書簡を読めばその使命が分かりますし、使徒行伝を読めば彼がどのようなご奉仕をしたか、良く分かります。

では、ペテロに与えられた「特別のご奉仕」「特別な使命」とは、どのようなものであつたのでしょうか。ご存じのようにイエス様がペテロを召されたとき、「わたしはあなたを人間をとる漁師にしよう」と仰せになりました。イエス様のこのみことばは、ペテロに与えられたご奉仕がどのようなものであつたのか、読み取ることができます。ペテロのご奉仕は、できるだけ多くの人々を主のみもとに連れて行くことでした。後になって、イエス様は、ペテロに「わたしは自分の教会を建てよう。わたしはあなたに天国の鍵を授けよう」と言われました。マタイ伝を開いてみましょう。

マタイの福音書 16章16節から19節

**シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」するとイエスは、彼に答えて言われた。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。ではわた**

しもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。わたしは、あなたに天の御国の鍵を上げます。何でもあなたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたが地上で解くなら、それは天においても解かれています。」

もう一箇所、読みましょう。

ヨハネの福音書 21章18節から22節

「まことに、まことに、あなたに告げます。あなたは若かった時には、自分で帯を締め、自分の歩きたい所を歩きました。しかし年を取ると、あなたは自分の手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をさせて、あなたの行きたくない所へ連れて行きます。」これは、ペテロがどのような死に方をして、神の栄光を現わすかを示して、言われたことであった。こうお話しになってから、ペテロに言われた。「わたしに従いなさい。」ペテロは振り向いて、イエスが愛された弟子があとについて来るのを見た。この弟子はあの晩餐のとき、イエスの右側にいて、「主よ。あなたを裏切る者はだれですか。」と言った者である。ペテロは彼を見て、イエスに言った。「主よ。この人はどうですか。」イエスはペテロに言われた。「わたしの来るまで彼が生きながらえるのをわたしが望むとしても、それがあなたに何のかかわりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい。」

鍵は「扉を開ける」ために使うものです。また「鍵」は、ことを始めるしるしです。「鍵」によってものが開けられ、そこで初めてことが始まります。ペテロのご奉仕は、いつもご奉仕を切り開いていく初めの役を果たしました。ペテロのご奉仕によって、エルサレムの教会が始まり、またコルネリオが住んでいたカイザリヤの地方の教会も、ペテロによって始められました。ペテロは最初ユダヤ人の間だけに伝道していましたが、やがて異邦人の間にも福音を宣べ伝えるようになりました。その始まりとして、「コルネリオの家族」が救いに導かれたのです。ペテロは福音を最初に異邦人にもたらした伝道者でした。ペテロは、「新しくことを始める鍵」を主から託された人でした。ペテロが人々に告げ示したメッセージは、「福音」であり、「天国」であり、「主なる神の国」でした。彼のメッセージの中心は、「どうしたら天国に入ることができるか」ということでした。五旬節のとき、彼は何度も叫んだのです。「悔い改めて、信じなさい」と。

イエス様がペテロをお召しになったとき、彼はどうしたのでしょうか。ペテロは漁師でした。イエス様に呼ばれたとき、彼は魚を取る網を海に「投げ捨てて、主に従い」ました。マタイの福音書 4章18節から20節

イエスがガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、ふたりの兄弟、ペテロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレをご覧になった。彼らは湖で網を打っていた。漁師だ

ったからである。イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。」彼らはすぐに網を捨てて従った。

彼のそれからのご奉仕は、ちょうど「イエス様に従った」そのときにしたことと同じでした。彼は「網を人々の上に投げ」、多くの人々を捕らえ、主のみもとへ導いていきました。海に網を投げると、いろいろな種類の魚が獲れますが、ペテロも、人々に網を投げ、いろいろな種類の人々を捕らえました。ペテロは、「新しい地を開く鍵を託された奉仕者」でした。彼はいつも、あるご奉仕の始まりを切り開いていきました。これがペテロのご奉仕の特徴です。

#### \* 第二番目。パウロのご奉仕

まず、彼の回心についての箇所を見ます。サウロは、イエス様を知ろうという気持は全くなかったのです。しかし、世界一の伝道者、「主を紹介する者」となりました。

使徒の働き 9章5節から9節

彼が、「主よ。あなたはどなたですか。」と言うと、お答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。立ち上がって、町にはいりなさい。そうすれば、あなたのしなければならぬことが告げられるはずです。」同行していた人たちは、声は聞こえても、だれも見えないので、ものも言えずに立っていた。サウロは地面から立ち上がったが、目は開いていても何も見えなかった。そこで人々は彼の手を引いて、ダマスコへ連れて行った。彼は三日の間、目が見えず、また飲み食いもしなかった。

すべて真っ暗でした。

使徒の働き 9章10節から15節

さて、ダマスコにアナニヤという弟子がいた。主が彼に幻の中で、「アナニヤよ。」と言われたので、「主よ。ここにおります。」と答えた。すると主はこう言われた。「立って、『まっすぐ』という街路に行き、サウロというタルソ人をユダの家に尋ねなさい。そこで、彼は祈っています。彼は、アナニヤという者がはいて来て、自分の上に手を置くと、目が再び見えるようになるのを、幻で見たのです。」しかし、アナニヤはこう答えた。「主よ。私は多くの人々から、この人がエルサレムで、あなたの聖徒たちにどんなにひどいことをしたかを聞きました。彼はここでも、あなたの御名を呼ぶ者たちをみな捕縛する権限を、祭司長たちから授けられているのです。」しかし、主はこう言われた。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。」

アナニヤは仕方なしに行ったのです。(喜んで行ったのではありません。)  
「危ない。パウ

口も、イエス様の御名を呼ぶ者になったのか。このことはアナニヤには想像できなかったのです。

パウロはペテロと違う面を持っていましたが、それでもペテロと一つでした。パウロは、ペテロと全く同じように福音を宣べ伝えていきましたが、更に進んだところにまで入って行きました。主がパウロに与えられた使命は、「教会を建て上げる」ことでした。主は信者たちに何を備えておられるか、信者に対する主のみこころは何であるか、これを教えるのがパウロに託された使命でした。パウロは「啓示」によって「まことの教会とは何であるか」を教えられ、集められた信者たちに、示された「まことの教会」を建て上げていく使命を与えられていたのです。

ペテロが異邦人に伝道を始める前に、一つのまぼろしを見たことが使徒行伝に記されています。

使徒の働き 10章11節から14節

見ると、天が開けており、大きな敷布のような入れ物が、四隅をつるされて地上に降りてきた。その中には、地上のあらゆる種類の四つ足の動物や、はうもの、また、空の鳥などがいた。そして、彼に、「ペテロ。さあ、ほふって食べなさい。」という声が聞こえた。しかしペテロは言った。「主よ。それはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことはありません。」

ペテロは、天からいろいろな種類の動物の入っている布がつり降ろされたまぼろしを見せられ、いろいろな人々をすなだるように教えられて、伝道を始めました。

パウロは、これとは少し違います。ペテロは「網と布」を持ってすなだる人でしたが、パウロは「天幕作りの技術」を持った人でした。ペテロの手には布があり、パウロの手には天幕がありました。布は縫い目のない未完成のものです。天幕は布を一つの形に縫い上げたものです。このようにパウロに与えられた使命、ご奉仕は、彼が幕屋作りであったように、主の家、からだなる教会を建て上げていくことでした。パウロにとって大切だったことは、人々が救いにあずかるだけにとどまらず、更に進み、成長し、主の家が建て上げられていくことだったのです。パウロはペテロのように、一日三千人もの人を救いに導くといった多くの出来事を表わしませんでした。パウロの使命は、救われた人々が上からのまぼろしに従って、一つの教会に建て上げられていくことだったのです。

イエス様は、回心し、熱心に信者の群れに集い、いわゆる良い信者になることだけを願ってはおりません。イエス様は信じる者がきよめとか、解放とか、表現はいろいろ異なっても、特別な体験をすることを第一に願ってはおりません。天から来られたひとりのお方、即ち「主イエス様をかしら」とする一つのからだ、つまり教会が建て上げられていくことを願っておられます。

コリント第一の手紙 12 章 12 節はよく読む箇所ですが、ここにキリストという名前が出てきますが、イエス様と救われた人々が一つになった一つのからだを言い表わしていることが分かります。私たちは、この「まことのイエス様」を見ることができたら幸いです。

コリント人への手紙・第一 12 章 12 節

**ですから、ちょうど、からだの一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。**

キリストと信じる者、とは書いていないのです。みな一つです。

主なる神の御目は、「まことのキリスト」とはイエス様だけではなく、「イエス様とそのからだである教会」が一つになった姿を、「まことの教会」として見ておられます。主なる神は、ただ一人の息子だけでなく、ご自分の栄光に引き入れられるべき多くの息子、娘を持ちたく願っておられます。主の御目からご覧になると、イエス様のからだなる教会は、ばらばらではなく、また教会の一人一人がばらばらの息子娘たちではなく、一つになっているのです。この「まことのキリスト」は、天のいのちと栄光を輝かせておられるのです。

パウロはこの福音を伝えるために使命を受けていました。パウロはペテロとこのように違ったメッセージを持っていたのでした。ペテロもそれを認めていたことが分かります。彼は次のように書いたのです。ペテロが殉教の死を遂げる最後に書いた手紙です。

ペテロの手紙・第二 3 章 15 節から 16 節

**また、私たちの主の忍耐は救いであると考えなさい。それは、私たちの愛する兄弟パウロも、その与えられた知恵に従って、あなたがたに書き送ったとおりです。その中で、ほかのすべての手紙でもそうなのですが、このことについて語っています。その手紙の中には理解しにくいところもあります。無知な、心の定まらない人たちは、聖書の他の箇所のばあいもそうするのですが、それらの手紙を曲解し、自分自身に滅びを招いています。**

また、パウロは「大工の棟梁」のような役をしていました。コリント第一の手紙 3 章の 10 節を見ると、彼は次のように書いていました。

コリント人への手紙・第一 3 章 10 節前半

**与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。**

パウロは、「主イエス様という土台」の上に建物を建てました。パウロは、主のご目的を信じる者に示そうとしました。主のご栄光を現わすために、信じる者がどのように主の家として建て上げられていかなければならないかを教えました。そのうち、パウロに、目に

見える困難がやってきました。パウロのメッセージに反対する者たちが出てきたのです。ですから、パウロはローマの刑務所の中で書いたのです。

ピリピ人への手紙 2章21節

**だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません。**

と言わなければならないような状態になっていたのです。

またパウロは、一つの辛い経験についても書いたのです。それは、彼がネロによって殺される前に書いた手紙です。

テモテへの手紙・第二 4章16節、17節

**私の最初の弁明の際には、私を支持する者はだれもなく、みな私を見捨ててしまいました。どうか、彼らがそのためにさばかれることのありませんように。しかし、主は、私とともに立ち、私に力を与えてくださいました。それは、私を通して、みことばが余すところなく宣べ伝えられ、すべての国の人々がみことばを聞くようになるためでした。私はししの口から助け出されました。**

アジアにいる者たちはみな私から離れた...と、パウロは書いたのですが、このアジアの人々とはいったい誰を指しているのでしょうか。パウロ自ら土台を据えたアジアの七つの教会の兄弟姉妹を指しているのです。言い換えるなら、アジアの人々は主がパウロを通して教えられた主のご目的を退け、主のみこころを捨てたのです。パウロはテモテに、自分が捕らえられ弁明しなければならなかったとき、「一人も自分を助ける者がなく、逃げて行った」と書き記しています。けれどもそのような時にも、パウロは、「主だけは私とともにいて助けてくださった」と喜んで言うことができたのです。

使徒時代の末期の教会は、このようにだめな状態になっていたのです。

\* 第三番目。ヨハネのご奉仕

ご存じのようにこのヨハネは、福音書を書き、三つの手紙を書き、黙示録も書いた兄弟です。彼の書いた福音書の初めの文章、ヨハネ伝1章1節を見ると次のように書かれています。

ヨハネの福音書 1章1節

**初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。**

もちろんイエス様のことです。「初めに、主イエス様があった。主イエス様は父なる神とともにあった。主イエス様は神であった」ということです。また彼が初めて書いた手紙を見ても、似ていることばが書かれています。

ヨハネの手紙・第一 1章1節、2節

**初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見えたもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて、このいのちが現われ、私たちはそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠のいのちを伝えます。すなわち、御父とともにあって、私たちに現わされた永遠のいのちです。**

パウロ亡き後、主は、ヨハネをご自分の道具としてお用いになりました。ヨハネは、ペテロやパウロとは全く違った使命を与えられていました。

ヨハネのご奉仕は、ペテロのご奉仕の糸口を切り開いていったのとはおおよそかけ離れたものでした。またヨハネのご奉仕は、パウロのように教会の秘密を語るといったものでもありませんでした。けれど、ヨハネはパウロ以上のメッセージを伝えたというわけではありません。メッセージはパウロがその頂点をなしています。パウロは主が永遠から持っておられたご計画の全部を告げ示しました。主は旧約聖書の時代から少しずつご自分のご計画をお示しになりましたが、パウロのときに至って、パウロにご自分のすべてのご計画をお示しになったのです。主はパウロに全部のご計画をお示しになられたのに、なぜ更にヨハネを必要とされたのでしょうか。それは使徒時代の終わりに、信者たちが悪魔のいざないに遭い、主のご目的を見失ってしまったために、ヨハネが必要でした。

エペソの教会がどのようになっていたかということは、エペソ書と、エペソについて書かれている黙示録2章を読むと分かります。エペソ書だけをとると、大変模範的な教会でした。しかし35、6年後に、エペソの教会は主の悩みの種になりました。

ヨハネの黙示録 2章4節、5節

**「しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行き、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。」**

「あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう」とは、もう使いものにならないということです。

ここにヨハネが立てられ、墮落してしまった教会をもう一度「光」に導く役を果たしました。ヨハネは別に何も新しいことを告げ示したわけではありませんでした。彼は「主の光」から遠ざかってしまった人々を回復させるメッセージを携えていたのです。

イエス様がヨハネをご奉仕に召されたとき、ちょうど彼は網を繕っていました。ペテロが召されたとき、彼は網を海に投げていました。パウロは天幕を作る者でした。自分も同業者であったので、その家に住んで一緒に仕事をしました。彼らの職業は天幕作りであったとあります。

ヨハネが召されたとき、彼は何をしていたのでしょうか。彼は網を繕っていました。  
マタイの福音書 4章21節、22節

そこからなお行かれると、イエスは、別のふたりの兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父ゼベダイといっしょに舟の中で網を繕っているのをご覧になり、ふたりをお呼びになった。彼らはすぐに舟も父も残してイエスに従った。

とあります。

ヨハネはペテロと同じように漁師でしたが、彼は召されたとき、ペテロの場合と違って、岸に腰を下ろし、網を繕っていました。繕うことは、元通りにすることです。ヨハネのご奉仕がそうでした。ヨハネは墮落した教会を「初めの状態」に戻そうとしました。

ここでヨハネによって書かれた箇所を開いてみましょう。ヨハネによる福音書は四福音書の中、最後に書かれています。ヨハネによる書簡は書簡の終わりに書かれ、またヨハネの黙示録は聖書の最後に位置しています。ヨハネによって書かれたこれらの聖書の箇所は、他の人々が書いたのとは全く違った面を持っています。

ヨハネはマルコのようにイエス様が何をなさったか、イエス様がなさったことを述べていません。また、山上の垂訓のようにイエス様の戒めを述べていません。一里ともに行くように頼まれたら、二里一緒に行き、上着をくれと頼まれたら二枚やりなさいなど、そのようなことは書いてありません。ヨハネは初めに返り、ことの核心に触れ、イエス様との交わりが正しければすべてが大丈夫であることを告げています。ヨハネは表面的なこと、たとえば、マタイ伝のイエス様について記されている系図のようなものには余り気を止めなかったのです。ヨハネは、「主から心が遠く離れてしまった人々が何とかして主のみもとに立ち返る」ように、心を痛めていたのです。ヨハネは、新しいメッセージを伝えませんでした。ただ誤った道へ行ってしまった兄弟姉妹を元のところへ連れ戻すメッセージをしました。

ヨハネの福音書には、二つのことが強調されています。それは、「恵みとまこと」という、二つのことです。「真理」は求めるものであり、「恵み」はいつも与えられるものです。この「真理と恵み」が一つになったお方が「イエス様」です。

たとえば、姦淫の女がイエス様のところへ連れて来られたとき、イエス様は、女に向かって「お前には罪がない」とはおっしゃいませんでしたし、また連れて来た聖書学者たちに「この女はこれで良い」ともおっしゃらなかったのです。イエス様は、取り巻く人々に「罪のない者がまずこの女に石を投げなさい」と言われました。「罪のない者がまず石でこの人を打つが良い」。このイエス様のおことばの裏には、イエス様が決して「真理を曲げる」お方ではないということが含まれています。しかし同時に、イエス様は「恵みそのもの」のお方でもあられました。他の者たちがその場を去ると、イエス様は女に「わたしもあな

たを罰しない」と、「恵みのみ声」をおかけになりました。

ヨハネの福音書を読むと、この二つの面、即ち「恵みとまこと」が含まれていることに気づきます。しかし、ヨハネの書簡を読むと、そこには「恵みとまこと」ということばを使わず、「光と愛」と書かれています。「神は光である」「神は愛である」と、ヨハネは手紙の中で書いたのです。ヨハネは福音書で真理について語りました。同じ真理について書簡でも語っていますが、彼は真理ということばを使わないで、「光」ということばを使っています。

同様に、福音書で恵みについて語っていますが、書簡では同じ恵みについて語っても、「恵み」ということばを使わず、「愛」ということばを使っています。どうしてでしょうか。もし、主なる「神の光」が人の心に射してくるなら、そこには「真理」が現われるからです。同じように「主の愛」が人の心に来るなら、そこには「恵み」が生じるからです。主なる神ご自身、「光と愛」そのものです。この光と愛が人間に照らされますと、真理と恵みになるのです。

しかしここで注意すべきことは、この「真理と恵み」が人によって誤って使われることがある、ということです。ご存じでしょう。聖書を通してどんなことでも証明しようと思えばできます。しかし、主なる神が「光であり、愛である」という事実は動かすことができず、「人間の曲げることのできない事実」です。

ヨハネが生きていたときの教会は、靈的に後退していました。ですから彼は初めのところへ立ち返るように、戻るように呼びかけたのです。恵みとまことは人によって誤って用いられてしまいました。そこで、ヨハネは光と愛という主のご性質を強く人々に訴え、そこへ戻るように勧めたのです。このように、ヨハネのメッセージは、特に新しいものではなく、「初めに返るように」と勧めたに過ぎません。

更に目を転じてヨハネの黙示録を読むと、すべてのことは元通りになる、と書かれています。

聖書の初めの創世記には、次のようなものが神の御手によって造られたことが記されていて、それが時を経るにしたがってだめになってきたことが述べられています。しかし、最後の黙示録には、「すべてのものが新しくされる」と告げられています。

創世記ではエデンの園について書かれています。黙示録では一つの町について書かれています。パウロは、まことの教会を見ました。同じこのさまをヨハネは、上から降りてくる都として、主から見せられました。ヨハネは特に新しいことを述べませんでしたが、すべてのことが「元通り」になり、「回復する」と告げ知らせています。

私たちはここまで、ペテロ、パウロ、ヨハネに与えられた三つのそれぞれ異なるご奉仕

を、一緒に見てきました。

- ・まず、ペテロは、多くの魂を主のみもとに導きました。
- ・次に、パウロは、上よりの示しにより、まことの教会を建て上げていった大工の棟梁のような役をしたことを見てきました。
- ・最後に、ヨハネは、だめになったすべてのことが元通りに回復すると伝えた人であることを見てきました。

多くの信じる者は、この地上に、「主のみこころにかなった教会」を建て上げることは不可能であると考えています。実際には、みこころにかなった教会ができて、保つことができるだろうけれど、しばらくすればそれはまた壊れてしまうと考えます。パウロも実際にこの悲劇を経験しました。けれども、ヨハネのメッセージを見ると希望が湧いてきます。ヨハネは、人の失敗を見ないで、「光と愛」そのものであられる主を見つめなさいと教えています。そこに希望があると教えています。ヨハネは、「主は決して変わらないお方です。主のご計画も決して変えられない。そして必ず成就されます」と言っています。

パウロは、ペテロのメッセージより更に進んだところまでいきました。ヨハネは、このパウロのメッセージを更に堅くし、上より降る「主の都」を私たちに教えてくれました。この都は、地上の教会の雛型です。

ヨハネの黙示録 21章1節、2節

**また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。**

- ・まず、網を広げ、たましいをすなどるペテロのご奉仕がどうしても必要です。
- ・これに続いて、すなどられた信者が成長するパウロのご奉仕もやはり必要です。
- ・更に続いて、生ぬるい状態になってしまった信者を元通りに引き上げるためにしたヨハネのご奉仕が続きます。

私たちの奉仕はペテロ的な面だけでしょうか。たましいが主のみもとに立ち返るだけで満足しているのでしょうか。それとも、それらの人々が霊的に成長することを願っているのでしょうか。私たちの願いは、「主のみこころをなしている」ことにあるのでしょうか。

これに対する私たちの答えはいったいどうでしょうか。この質問は答えるに難しいと思います。けれども私たちの願うことは、いわゆる「基礎的な教え」にとどまらず、更に前に人々を導くご奉仕にあずかるべきなのではないでしょうか。

ある父親が自分の息子を医者にしようとしてしました。息子はその願いを入れて医者になる

大学に入ります。しかしそれで父親の目的が果たせたわけではありません。父親の計画の第一歩が始まったに過ぎないのではないのでしょうか。

確かにペテロ的なご奉仕はどうしても大切です。更に熱心に御霊に導かれて、たましいを主のみもとに連れ来る人々が出ることを願っていますが、人々が主のみ救いにあずかっただけで、私たちは満足して良いのでしょうか。多くの人々が救われることは実に素晴らしいことですが、救われた信者が別々に、またばらばらになっていることは主のみこころではありません。主が願っておいでになることは、これらの信者がイエス様と一つになって一つのからだを形造ることです。この幻は実に尊いものであり、これを見るためには多くの代価を払わなければなりません。「生まれながらの人間」を、すべて犠牲として主の前にささげられなければなりません。「イエス様と教会」が一つになった、この一人の人の中に、古き人が宿る余地は一つもありません。

ヨハネは言ったのです。「彼(イエス様)は盛んになり、私は衰えなければなりません」。また、この「まことのキリストをかしらとする教会」においては、命令するものは人間ではなく、イエス様ご自身となるはずです。人の命令と主の命令に、同時に従うことはできません。もし、私たちが「教会とは何か」を本当に知ったなら、イエス様だけをかしらとして認めるでしょう。しかし、イエス様だけをかしらとして仰ぐとき、それまでの伝統や組織や人間の考えていることの中に摩擦が生まれてくるでしょう。

主なる神は、多くのばらばらに分かれた信者を求めてはおられません。イエス様をかしらとして、すべての信者を肢体とする一つのからだが出来上がることを望んでおいでになります。

ある学者が一人のキリスト者に言いました。「私は天国へ行きたくない。なぜなら、創世から今まで、数知れないほど多くの人々が天国へ行ってしまったから大変。そんなに住みにくいところへ行きたくない」と言ったそうです。イエス様を知るようになった者はこれに対して答えたのです。「違います。とんでもない。天国にはただ一人の人しかいません」と答えたのです。学者はもちろんびっくりし、いったいどういうことなのか、と。答えは、「天国はイエス様をかしらとし、主のいのちにあずかるようになったすべての者はかしらの肢体にすぎない。これは永遠の昔から主なる神が抱いておられるご計画です」と。主は今もなお、このご目的を実現するために働いておいでになります。

私たちの目ざしているところは、主のご目的と違っているのでしょうか。主のご目的は私たちの目的と違うのでしょうか。私たちは自分の目的をなそうとしているのでしょうか。主のご目的をなそうとしているのでしょうか。大切なことは、「主のみこころがなされていく」ということです。私たちは既に、主のご目的を拝したのでしょ

「主のからだなる教会」が、私たちのすべてとならなければなりません。もし、私たちがこのことを知るようになるなら、他のものでは決して満足できない状態になります。これは、決して一つの教えではありません。「天的」な事実です。永遠からもっておられた主のご目的です。主は今日も、ご自身と心をつにする者を尋ね求めておいでになるのではないのでしょうか。

主は私たちを、ペテロと同じように人をすなだる漁師としてお用いになることを願っておいでになります。しかし、主は私たちがそこにとどまることで満足できません。かつてパウロに与えられたと同じメッセージを、私たちにも託したく願っておいでになります。多くの方は、パウロの教えに教理的には賛成しますが、実際には不可能であると考えます。私たちは、ヨハネのように希望を失わず、主だけを仰ぎ見たいものです。そうするなら、私たちは主の素晴らしさを経験するようになります。

もう一度、主がパウロに与えられたメッセージとはどのようなものなのかを読んでみましょう。主は、各地方の集会在「かしらなるイエス様のご栄光を現わす」ことを、また各地方の集会在全て有機的につながって、一つのイエス様の肢体をなすことを願っておいでになります。

やがて使徒時代の終わりが近づき、教会が墮落してしまい、これを回復させるためにヨハネのメッセージが必要となりました。ヨハネのご奉仕をまとめると、七つの教会の勝利を得る者に対する約束にまとめられるでしょう。主は、墮落してしまった教会の中に勝利を得る者を探し求められます。

最後に黙示録の2章。(2章と3章の中に似ていることばが7度も出てきます。)

ヨハネの黙示録 2章7節

**「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。」**

ヨハネの黙示録 12章10節から12節

そのとき私は、天で大きな声が、こういうのを聞いた。「今や、私たちの神の救いと力と国と、また、神のキリストの權威が現われた。私たちの兄弟たちの告発者、日夜彼らを私たちの神の御前で訴えている者が投げ落とされたからである。兄弟たちは、小羊の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼に打ち勝った。彼らは死に至るまでもいのちを惜しまなかった。それゆえ、天とその中に住む者たち。喜びなさい。しかし、地と海とには、わざわざ来る。悪魔が自分のときの短いことを知り、激しく怒って、そこに下ったからである。」

この2章、3章の中に、何度も「勝利者」ということばが出てきます。勝利を得る者は云々...と。それは特に良いキリスト者ではなく、当たり前な平凡な主の救いにあずかった者のことです。主によって勝利を得る者と呼ばれない兄弟姉妹は、まだ成長していないのです。勝利を得る者とは、主が兄弟姉妹の心の目を開いてくださり、ご自分のご目的を見せることのできた人を言います。

主のご目的は決して変わりません。主が目ざされるのは、キリストをかしらとし、信じる者を肢体とする一人の「新しい人」です。主は、信じる者が勝利に勝利を重ね、悪魔が逃げてしまわなければならないほどに、勝ち得て余りある生活を送ることを願っておいでになります。これがヨハネの言う「勝ちを得る者」の意味です。私たちが主のご目的が何であるかを知ることができるなら、本当に幸いです。

私たちすべての兄弟姉妹が、与えられた使命を忠実に全うし、新約聖書に語られているどうしても必要なこの「三つの使命」のご奉仕を成し通す恵みが与えられることが出来れば、感謝です。

救いは、悩むことなしにあり得ません。成長も、悩むことなしにあり得ません。回復も、悩むことなしにあり得ないのです。

了